

オックスフォード大学
REES センター

里親家庭でケアを受けることと子どもの教育成果の関係は どのようなものか？

国際系統的文献調査

Aoife O' Higgins, Judy Sebba and Nikki Luke

Acknowledgements

We are grateful for the comments received on an earlier draft from Alison Alexander, Professor David Berridge, Kim Bromley-Derry, Dr John Fletcher, Dr Nuria Fuentes Pelaez, Professor Ernesto Macaro, Dr Sara McLean, Sally Melbourne and Dr Karen Winter. We are also very grateful to the foster carers who offered their comments and support including Richard Field and Jane Vellacott. Responsibility for the final text remains with the authors.

The Rees Centre for Research in Fostering and Education is supported by the Core Assets Group, an international children's services provider with a particular interest in fostering services in the UK and internationally and by other funders. The Centre's research agenda is developed in consultation with Core Assets and other key stakeholders in the UK and internationally. These stakeholders include children and their foster carers, social workers, teachers, local authorities, managers across the public and independent sectors and wider society. The research undertaken and its publication is governed by the University ethics process, and conducted independently of any specific interest groups or funders.

Aoife O' Higgins, Judy Sebba and Nikki Luke
Rees Centre for Research in Fostering and Education
University of Oxford

September 2015

© 2015 Rees Centre. All rights reserved

ISBN: 978-0-9929071-8-1

eISBN: 978-0-9929071-9-8

本報告書は早稲田大学社会的養育研究所がオックスフォード大学 Judy Sebba 教授から許可を得て、原著 What is the relationship between being in care and the educational outcomes of children? An international systematic review(2015)を日本語訳したものです。

日本語訳作成をご快諾いただいた Judy Sebba 教授、監訳チームで本論文をご担当いただいた山梨県立大学高石啓人講師、そして本事業に助成していただいた日本財団に心より感謝申し上げます。

早稲田大学社会的養育研究所
所長 上鹿渡和宏

目次

要旨.....	4
主要調査結果.....	5
政策・実践への提言.....	6
将来の研究への提言.....	6
主な内容.....	7
文献調査の背景.....	7
目的と範囲.....	10
方法論.....	10
先行研究の状況.....	12
主要調査結果.....	13
現在のエビデンスベースの限界.....	22
結論.....	23
政策、実践への提言.....	23
将来の研究への提言.....	24
REFERENCES.....	25
APPENDIX 1:.....	31
APPENDIX 2:.....	35

要旨

ケアを受ける子どもの教育は、長きにわたって政策立案者、実務家、里親、教師、そして当事者たる若者たちにとっての関心事項となってきた。政府データおよび研究は、ケアを受ける子どもと彼らと同年代の子どもとの間の達成ギャップが、長年にわたって解消されずにいたことを示してきた。さらに国際研究は、ケアを受ける子どもの低い教育的達成が、多くの国で問題となっていることを示している (Dill, Flynn, Hollingshead, & Fernandes, 2012)。

数十年に及ぶ、そして3つの大陸にわたる研究は、ケアを経験した成人の健康、雇用、一般的幸福の成果が良好ではないことも立証している (Blome, 1997; Buehler, Orme, Post, Patterson, 2000; Dill et al., 2012; Harris, Jackson, O'Brien, & Pecora, 2009; Jackson, 2013; Social Exclusion Unit, 2003)。ケアを受けた人々は、一般の人々よりも人生のある段階で失業したり、精神衛生上の問題を抱えたり、服役あるいは精神病院に入院したり、ホームレス状態となる可能性が高い (Centre for Social Justice, 2015; Jackson & McParlin, 2006)。学業面で成功を収めることは、より良好な長期的成果に結びついており、そのため成績を上げることはこうした好ましくない人生の道筋を断つ上で重要な戦略である (Gorard, Beng, & Davies, 2012)。本調査は、里親あるいは親族¹のケアを受けることと教育成果の関係のエビデンスを調査することで、既存の文献に貢献することを目指す。

この研究は、以下の3つの問いを扱う既存の研究エビデンスを検討するために行われた。

- ・ ケアを受けることと教育成果には関連性があるか？
- ・ ケアを受けることと教育成果の関連性の本質とは？
- ・ そうした関連性の因果関係を示唆するエビデンスはあるか²？

電子データベースとWebサイトを使用し、全英、米国、カナダ、オーストラリアにおける2つの文献調査/メタ分析を含む28の研究が割り出された。各国の比較は、文化およびサービスの違いにより限定的なものとなっている。文献調査のために割り出された研究は1990年以降に発表されたものであり、すべて英語で執筆されている。2つの研究 (Barber & Delfabbro, 2005; Conger & Rebeck, 2001)を除き、すべての研究は比較群を用いている、あるいはケアを受けている子どもを一般集団と比較している。研究サンプルの若者の人数は107人から222,000人までとなっている。

¹ 本調査は里親または正式な親族によるケアを受けている子どものみを対象としている (方法論を参照)。里親養育は、血の繋がっていない家族と子どもが生活を共にする措置として定義される。正式な親族によるケアにおいては、子どもは自治体が組織した正式な手順によって親族と生活を共にする。

² 定義および詳細については付録2 (APPENDIX 2) の用語解説を参照。

主要調査結果

ケアを受けている子どもは集団として、成績を含む教育的達成、すなわち、読み書きおよび計算能力のテストの成績、出席、退学といったいくつかの評価基準において、ケアを受けていない子どものグループに後れを取っていることは、調査結果から明白である。

しかしながらケアを受けることと教育成果の関係の強さは、ジェンダー、民族性、特殊教育のニーズなど、達成に関連していることが知られている個々の特徴を考慮に入れると弱まる。ケアの影響を、子どもがケアを受ける前のこうした個々の指標（例：マルトリートメント（不適切な養育））から切り離そうと試みた研究もある。それらの研究は、ケアを受ける子どもと同年代の子どもの間の達成格差が、こうした要因の考慮に伴い、さらに縮まることを発見した。しかしながら、いくつかの研究は格差が残るという結論を導いている。

本調査の結果は、ケアを受けることと低い教育成果の関係が、ケアを受ける前の経験によって部分的に説明されることを示唆している。たとえば、マルトリートメント（不適切な養育）やネグレクトである。こうした若者たちが直面する困難は、ケアを受けることに先行しているかもしれない。しかしたとえ軽減されても、これらはいくつかの研究では、ケアを受けても残ることが確認されている。

こうした結果をあわせて、ケアに先行して子どもが直面する困難、ケアを受けるようになってからの困難の持続、教育成果への影響を浮き彫りにしている。

概して本調査は、ケアを受けることと教育成果の間には相関関係¹があるが、この関係には数多くの個人・家庭・環境リスク要因が介在していることを発見している。エビデンスは混合しているが、里親あるいは親族のケアを受けること自体が、ケアを受ける子どもの教育成果にとって有害であるとする主張の裏付けはほとんどない。

¹ 定義および詳細については付録2の用語解説を参照

政策・実践への提言

概して、ケアが子どもの教育にとって有害であるとはいえないとする研究結果は、子どもの成長を可能にするサービスを提供する戦略に尽力すべきであると述べている（例：Forsman & Vinnerljung, 2012; Liabo, Gray & Mulcahy, 2012）。定性研究も、たとえば成功し、大学に進学することができた、ケアを受けた子どもの数多くの例を記録している（Martin & Jackson, 2002）。

ケアを受けることは教育成果にとって有害であるとするエビデンスはほとんど見つからなかったものの、ケアを受けることが学業にとって有益であるようにも思えないことを本調査は浮き彫りにしている。実際、多くの不利益を考慮した上で、ケアを受ける子どもが同年代の子どもよりも成績が良いことを発見した研究はわずか2つしかない（Berger et al., 2015; McClung & Gayle, 2010）。研究者、実務家、政策立案者はそのことを懸念すべきである。Krebs & Pitcoff (2004, p. 365) は、「里親制度は、被保護者 [である若者] に起こることに全面的責任を負わねばならない」、そして若者が成功する機会を提供する責任をケア制度が担うことはとても重要であることを再認識させてくれる。

将来の研究への提言

本調査において発生した方法論上の問題は広範、かつ複雑なものとなっている。付録 2 には用語解説があり、定義と詳細が含まれている。

ケアを受けることが教育成果に及ぼす影響を評価しようとするさらなる研究は、可能な限り、因果推論を可能とするより均質的なサンプル、適切な比較群および方法論を使用すべきである。研究はまた、サンプルに含まれる子どもや若者のさまざまな体験や特徴をできる限り詳しく提供すべきである。それによって、教育成果に対するその他の潜在的原因を判断できるようになる。ケアを受けることについての基礎アセスメントと長期フォローアップを備えた、時系列データを用いる研究も必要とされている。研究成果に、ケアを受けることのみを原因とする混乱が表れないように保証することが重要となる。

多くの研究が、ケアに先行する重要な経験についてのデータを欠いていることに苦しんでいる。たとえばマルトリートメント（不適切な養育）など、ケアに先行する経験の多くは教育成果を予想する重要な因子であり、ケアの影響を切り離す際に考慮する必要がある。こうした発見は、研究用のデータ生成および低い学業成績のリスク因子の理解双方の観点から、実践と同じくらい重要である。

主な内容

文献調査の背景

ケアを受ける子どもの教育は、長きにわたって政策立案者、実務家、里親、教師、そして当事者たる若者たちにとっての懸念事項であった。事実、政府のデータおよび研究は、ケアを受ける子どもとそうではない子どもの間に、長年にわたって格差が根付いていたことを示してきた。英国では2014年に、キーステージ1（7歳）ではケアを受ける子どもの71%が読解力で期待される水準に達し、その数字は書く能力では61%、算数では72%となることを教育省のデータ（DfE, 2014b）が示した。比較すると、全ての子どもが対象¹ではそれぞれの教科で90%、86%、92%となっている。キーステージ2では格差は広がり、ケアを受ける子どもの48%が英語と算数で予想学習水準に達するのに対し、全ての子どもが対象では79%となっている。子どもの年齢が上がるにつれて達成格差は広がり、ケアを経験した人々の7%が大学に進学する²のに対し、一般集団の若者では50%強となっている（DfE, 2012, 2014a）。国際研究は、ケアを受ける子どもの低い教育的達成は、国境と時代を超えて広がる問題であることを示している（Dill et al., 2012; Pecora, 2012）。

数十年の時間と複数の大陸に及ぶ研究は、ケアを経験した成人の健康、雇用、一般的幸福における貧しい成果も記録している。（Blome, 1997; Buehler et al., 2000; Dill et al., 2012; Harris et al., 2009; Jackson, 2013; Social Exclusion Unit, 2003）。ケアを受けたことがある人々は、一般集団の同世代の人々よりも、人生のある段階において失業したり、精神衛生上の問題を抱えたり、刑務所や精神病院で過ごしたり、ホームレスを経験したりする可能性が高い（Centre for Social Justice, 2015; Jackson & McParlin, 2006）。学業で成功を収めることは、一般集団においてより良好な長期的成果に結びついており、そのため成績を上げることはこうした好ましくない人生の道筋を断つ重要な戦略である（Gorard et al., 2012）

本調査は、里親あるいは親族のケアを受けていることと、教育成果の関係のエビデンスを研究することで、既存文献に貢献することを目指している。特に、ケアを受けていることと教育成果の因果関係のエビデンスがあるかどうかを究明するために、既存研究を概観している。

ケアを受ける子どもとは誰のことか？

ケアを受ける子どもとは、国家が何らかの親責任を有する、一般的に18歳以下の³若者のことである。多くの場合、子どもは親のケアから引き離され、代替居住地と国家機関、慈善施設または国と契約している民間組織による支援が提供される(Thoburn, 2010)。こうした子どもの立場を述べる上で、異なる国や地域で異なる用語が使用されている。たとえば家庭外養育(米国、カナダ、オーストラリア)や社会的養護児童(英国)などである。「ケアを受ける子ども」という用語は、広義にわたる包括的用語であり、本調査の目的のために採用され、法的地位における差異を認めるものである。高所得国⁴で子どもがケアを受けるのは、ネグレクトやマルトリートメント(不適切な養育)を受けたり、孤児となったり、両親が不在であったりするためである(Fernandez & Barth, 2010)。子ども、特に思春期の若者の中には、親が対応できない行動的困難を抱えるためにケアを受ける人々もいる(Sinclair, 2006; Whittaker, 2006)。

ケアを受ける子どもの数を推定することは、それが常に流動的であり、「ケアにある」地位の定義が多様であり、国によって統計収集の方法が異なるため、難しいものとなっている(Thoburn, 2010)。ケアを受ける子どもの数は2014年3月に英国で約69,000人(DfE, 2014b)、2013年9月に米国で400,000人(U.S. Department of Health and Human Services Administration for Children and Families, 2015)、2007年にカナダで67,000人(Mulcahy & Trocme, 2010)、2012年にオーストラリアで40,000人(Australian Government: Australian Institute of Family Studies, 2014)となっている。

¹ この数字にはケアを受ける子どもが含まれている。

² この数字は、2014年に高等教育に進学した21歳以下のかつてケアを受けた人々に関するものである。のちに大学に進学した人々は含まれていない。

³ 特定の管轄区域ではこの数字は低くなる場合がある(例:16)。

⁴ ここでは、世界銀行による定義を使用している。

[HTTP://DATA.WORLDBANK.ORG/ABOUT/COUNTRY-CLASSIFICATIONS](http://data.worldbank.org/about/country-classifications)

本調査が高所得諸国を扱っているのは、社会サービスが概ね同じように運営されているためである。

ケアを受けることと教育成果の関係について私たちが知っていること

ケアを受ける子どもと、そうでない子どもの間には、重要な教育成果の格差があることを研究は立証している (Berridge, 2007; Goddard, 2000)。それに応じて、ケアを受ける子どもの教育的達成を支援する介入は、近年その数を増やしている (Forsman & Vinnerljung, 2012; Liabo et al., 2012; Tordön, Vinnerljung, & Axelsson, 2014; Vinnerljung, Tideman, Sallnäs, & Forsman, 2014)。

しかしながらその先に、この達成格差の原因、およびケア制度、その内容または特徴が一因となっているかどうかについての議論が続く。

Berridge (2007) は、ケアに先行するリスク因子が教育上の失敗と密接に結びついているため、ケア制度を非難することは不誠実であるかもしれないと論じている。しかし Jackson (2007, p. 4) はこれを却下し、こう述べている。「ケア制度の欠陥ではなく、ケアを受ける子どもの出身家庭の特徴に答えは見つけられるとする彼の結論 [Berridge, 2007] に、私は強く反対である。」同様に Connelly and Chakrabarti (2008, p. 355) も、「ケアを受けることが子どもの読み書き、算数の能力に及ぼす悪影響」についての懸念を表明している。しかし Forester et al. (2009) による、ケア制度が子どもの成果に及ぼす効果についての系統的な調査から得られた発見は、概してケアを受けることが子どもの幸福にとって有害であるとはいえないと示唆しているが、利用可能な研究の質のためにその結論は限定的なものとなっている。

子どもの教育にとってケア制度が有害であるか否かについての議論が続く一方で、この主張を支持する研究エビデンスの範囲ははっきりしていない。

この調査は、教育という1つの成果のみに焦点を絞った先行研究に基づいているが、この議論に貢献するために国際的な発表に範囲を広げている。

目的と範囲

本稿は、里親あるいは親族のケアを受けることと、教育成果の関係を検討する国際系統的文献調査である。

本調査の目的は三つある。第1に、里親または親族のケアを受けることと、教育成果の間に関係があるかどうかを検討することを目指す。第2に、この関係についての理解を深めるために、その本質を究明する。第3に、里親または親族のケアを受けることそれ自体が、貧しい教育成果の原因であると示唆する、つまり、因果関係を認めるエビデンスが存在するかどうかを追求する。

本調査の目的のため、研究の時点でケアを受けていた学齢期にある子どもの教育成果のみが検討され、里親または親族のケアを受ける子どもが大半を占めるサンプルのみが検討された。養護施設にいる子どもたちは、より多くの行動的困難と特徴的な教育上のニーズを抱える傾向にあり、養護施設にいる子どもについて、本調査の目的を探るには別個に検討が必要である (Knorth, Harder, Zandberg, & Kendrick, 2008; Sinclair, 2010; Whittaker, 2006)。

本調査は、里親養育経験の内容や要素の貢献には焦点を当てていない。たとえば、措置が安定しないことや里親養育者の特徴と、教育成果の関係は分析していない。これから発表される研究は、ケアを受ける子どもについての教育成果の相互関連性を詳しく述べている。O' Higgins, Sebba, Gardner & Luke (近日発表) を参照。

方法論

本調査は、ケアを受けることと教育成果の関係性についての国際文献から得られた発見を統合している。

研究対象となるには、研究は里親あるいは親族のケアを受けることと、教育成果の関係を検討していなくてはならない。参加者は、研究の時点で里親または正式な親族によるケアを受けていた、5歳から19歳までの学齢期にある子どもである。定量研究のみが含まれ、本調査の目的にあっていれば、あらゆる研究設計が許容される。

定量研究が目指すのは、集団レベルの平均を提供することである。この文脈では、ケアを受ける子どもの教育成果にとって、概してケアを受けることは有害であるかどうかを確認することが目的となる。定性研究の文献は、ケアを受ける、あるいはそのような中で育った若者たちの経験を詳細に述べ、多くを提供している。これら文献は、低い教育的達成に内在している因子について異なる洞察を提供する可能性がある。しかしそうしたものは、本調査が定量化可能な成果の比較に焦点を当てているため、範囲からは外れた。教育成果は、成績評価、テストの点数、認知テストの結果、出席、原級留置、退学などの、何らかの学業成績の定量化可能な基準によって定められる。検索は英語のみで行われたが、フランス語またはスペイン語による論文（第一著者の話す言語）が確認された場合は、含めるかどうか決めるために検討された。検索は1990年以降に発表された研究のみに限定された。

検索する方法としては、学術データベース、ウェブサイト、ハンドサーチを対象とした。1990年から2014年3月までの研究について、9つの学術データベースおよび18のウェブサイトが調べられた。それにはERIC、British Education Index、Australian Education Index、International Bibliography of Social Sciences、Scopus、Medline、PsycINFO、Social Services Abstracts、Sociological Abstracts、Evidence

for Policy and Practice Information and Co-ordinating Centre (EPPI-Centre)、Database of Education Research、Campbell and Cochrane Libraries、Social Care Online (the Social Care Institute for Excellence の一部)、Google ならびに Google Scholar、the National Foundation for Educational Research (NFER)、The Centre for Excellence and Outcomes in Children and Young People's Services (C4EO)、Current Education & Children's Services Research UK (CERUK Plus)、The Fostering Network、British Association of Adoption and Fostering (BAAF)、NCB (National Children's Bureau)、National Society for the Protection of Children against Cruelty (NSPCC)、Joanna Briggs Institute、What Works Clearinghouse、Department for Education、Chapin Hall and The Office of Planning、Research and Evaluation in Administration for Children and Families (米国) が含まれている。検索では、「里親養育 (foster care)」および「教育 (education)」を述べる探索文字列を作成するために、以下の国際的な用語が使用された。

「foster care」または「foster home」または「foster family」または「foster parent」または「foster carer」または「substitute family」または「family foster home」または「kinship care」または「child in care」または「children in care」または「out-of-home care」または「out of home care」または「looked after」または「looked-after」。

教育*または学校*またはクラス*または大学*または教える*または学ぶ*または訓練*または卒業証書*または証明書*または家庭教師*または達成*または実行*または学術または達成。

参考文献一覧とジャーナル誌 (Children and Youth Services Review) については、ハンドサーチが行われた。最後に、数多くの世界中の専門家に助言が求められた。その研究は、本調査の課題設定に答える内容について、批判的に評価された。各研究の強みと限界は、発見の要約に織り込まれ、専門用語の定義は付録 2 に収録されている。

検索によって 7000 件以上の研究が確認され、そのすべてが第一著者によって精査された。第二著者はその 10% を精査した。311 本の論文の全文が入手され、そのうち 28 本が本調査に含まれるために保持された。

我々の検索方法によって確認されていない報告が国際的に存在する可能性を、我々は認識している。

先行研究の状況

本調査には、2つの文献調査論文を含む（うち1つはメタ分析を含んでいる）28の研究が含まれている。研究は以下の国で行われ、いくつかの結果の転換性を限定する可能性のある、制度上の違いが認識される必要がある。

米国	16
オーストラリア	4
カナダ	4
全英	3
多国間	1

サンプルの数は107から22,079となっており（この数字にはケアを受ける子どもと比較群の子どもが含まれている）、1つを除いてすべてが男女間で等分されている。多くの研究において民族性が報告されている。しかし、特定の民族集団の数が過多あるいは過少となっているかどうかは報告されていない。年齢幅を狭く絞っている（例：2歳）研究もあれば、5歳から18歳までと広範に及んでいる研究もある。

特殊教育のニーズ（SEN）を持つ子どもを含んでいる研究のほとんどは、有病率を提供していない。提供している場合であっても、そのニーズが身体的なものであるか、学習障害であるか、感情・行動上の問題であるかを説明しているものはほとんどない。同様に、マルトリートメント（不適切な養育）の経験について何らかの情報があっても、マルトリートメント（不適切な養育）の種類や頻度について詳細を提供している研究はほとんどない。SENといった特質、マルトリートメント（不適切な養育）といった経験は、学業成績に影響を与える可能性があるためこうした情報は重要であり、それゆえ分析で考慮されるべきなのである。

居住環境が農村であるか、都市部であるか、子ども（あるいは実親や養育者）の社会経済的地位といった措置の種類について報告している研究は、含まれたもののうち半数に過ぎない。わずか3つの研究のみが実親について報告しており、子どもが国立あるいは民間のケアの提供者によって住居を提供され、支援を受けているかどうかを報告している研究はない。

含まれた研究の詳細については付録1を参照。

主要調査結果

同年代の子どもと比較した、ケアを受ける子どもの学校における振る舞い

先行研究の結果同様に (Berridge, 2012; Goddard, 2000)、ケアを受ける子どもと一般集団の子どもの間の教育成果の格差を立証する、強力なエビデンスを提供するいくつかの研究を本調査は発見した。

Trout et al. (2008) は米国でケアを受ける子どもの学業状態に関する系統的調査を実施した。その調査に含まれている 28 の研究の大半が、ケアを受ける子どもの 3 分の 1 以上の成績が「低から平均」または「低」の範囲であることを発見した。成績の良い子どもや若者はいずれの研究においても見つからなかった。この研究は、ケアを受ける子どもの間で、頻繁な転校、数多くの留年する生徒、多くの欠席、高い退学¹率が見られることも発見した。Scherr (2007) はメタ分析を実施し、ケアを受ける子どもは、特別教育に不釣り合いにその数が多く、留年率が高く²、同年代の子どもよりも退学の割合が高いことを発見した。これらの研究から得られる結論は明白である。成績評価、読み書きおよび計算のテストのスコア、出席、退学を含む教育上の達成の数多くの基準において、ケアを受ける子どものグループは、同年代の子どもに後れをとっている。これら 2 つの文献に含まれる研究は、以下再度説明されることはない。

上記の文献に含まれていない数多くの研究が、本稿のために特定された。The Australian Institute of Health and Welfare (2007, 2011)、Flynn and Biro (1998)、Iglehart (1995)、Mitic and Rimer (2002)、Rees (2013)、Townsend (2012) および Turpel-Lafond (2007) も、ケアを受ける子どもと同年代の子ども間に似たような達成格差を発見している。

¹ 退学 (EXCLUSION) の用語はあらゆる追放、停学、放校を述べるために使用されている。

² 多くの国において、学年の終わりに目的基準に達していない子どもは、学年を繰り返すことがありそれは「留年」(GRADE RETENTION) として知られている。できる限り同年齢の子どもと就学することが子どもにとって重要であると考えられているため、英国では実践されていない。

たとえば、オーストラリアの研究では (AIHW, 2007, 2011; Townsend, 2012)、ケアを受ける子どもは全地域において読み書きと算数能力の中央スコアが、テストされた一般集団の児童よりも低くなっている。Rees (2013) は、英国でケアを受ける子どもは、認知、読解、読み書きのテストのスコアが一般集団の児童よりも低くなっていることを発見した。カナダ (e.g. Mitic & Rimer, 2002) や米国 (Iglehart, 1995) でも似たような状況となっている。

こうした研究の結果は明白なものである。ケアを受ける子どもとその同年代の子どもの間には、数多くの面において、教育的達成格差が存在している。こうした厳然とした発見は、ケアを受けることと貧しい教育成果の間には因果関係が存在しているとの想定を導きうる (つまり、ケアを受ける子どもの多くの達成が低いものとなっているため、ケア制度が低い達成の原因となっているに違いない)。しかしながら、上述の研究は関係が存在していることを示すにとどまり、ケアを受けることと貧しい成果の間の、原因から結果へといたる相関性については、いかなるエビデンスも提供していない。これらの研究ではそれ以外のいかなる因子も考慮されておらず、ケアを受けることと教育成果の間の相関性は、他の要因によって混乱している可能性がある。

ケアを受ける子どもの教育成果を説明する上で他の因子を考慮する

ケアを受ける子どもまたは一般集団の子どもについての過去の研究は、多くの個人、家庭、学校、コミュニティ、政策因子が、学業成績を予測する上で影響を与えていることを発見してきた (例: Sylva et al., 2014; O' Higgins, Sebba, Gardner & Luke 近日発表)。ケアを受けることが学業成功に与える影響を取り出す上で、こうした因子は考慮される必要がある。

本調査に含まれる 6 つの研究は、ケアを受ける子どもと一般集団の子どもの教育成果を比較している。こうした研究はリスク因子を制御、または多くの因子が適合されたサンプルを使用しており、それらは成果予測に影響を与えると仮定されている。

Farruggia, Greenberger, Chen and Heckhausen (2006) および Sawyer and Dubowitz (1994) の研究では、同じ学校から集団が選ばれ、年齢、ジェンダー、民族性が適合された。どちらの研究も、ケアを受ける子どもの成果が低いことを発見している。

Burley and Halpern (2001) はジェンダー、民族性、学習意欲、特殊教育のニーズ、学校での困難に関連する 4 つの変数と、4 つの家庭因子を制御した。そして第 3 学年 (8 歳から 10 歳) のテストのスコアのパーセンタイル順位において、ケアを受ける子どもは 7 ポイント低下することを発見した。第 6 学年および 9 学年でも結果は似たようなものとなっている。そのことは、上記の因子が考慮された後でも、ケアを受けることと低い教育成果が関連していることを意味している。

Geenen and Powers (2006) は、(1) 特殊教育のニーズがある、ケアを受ける子ども、(2) 特殊教育のニーズがない、ケアを受ける子ども、(3) 特殊教育のニーズがある、ケアを受けない子ども、(4) 一般集団の子ども、の 4 つの群を比較した。他のどの群よりも成績が悪かったのは、特殊教育のニーズがある、ケアを受ける子どもであった。特殊教育のニーズがない、ケアを受ける子どもは、特殊教育のニーズがある、ケアを受けない子どもと同様の成果を示した。

Pears, Fisher, Bruce, Kim and Yoerger (2010) および Pears, Kim, Fisher and Yoerger (2013) の研究では、ケアを受ける子どもの社会経済的状況が、マルトリートメント (不適切な養育) を経験していない、実親と生活する子どものコミュニティサンプルと適合された。これら 2 つの研究は年齢、認知能力、および 3 つの学校因子を制御した。どちらの研究も、実親と生活する子どもよりケアを受ける

子どもの成績が悪いことを発見している。

上述の研究の結果は、他の因子が考慮された後でも、ケアを受けることがリスクであると示唆している。しかしながら、他の因子、とりわけジェンダー、民族性、特殊教育のニーズといった個人的特徴が分析に含まれると、ケアを受けることと教育成果の関係は薄まるように思われる。

上述の6つの研究において、ケアを受ける子どもは一般集団の若者と比較されている。そのため、ケアを受ける子どもとその学業成績に、特に関連性のあるリスク因子を制御することは不可能であった。過去の研究は、ケアを受ける子どもの多くはケアを受ける前に、持続的貧困、マルトリートメント（不適切な養育）、生まれながらの複合的リスクといった多くの不利益を経験していることを浮き彫りにしている。ケアを受ける子どもは高リスク家庭出身である可能性が高く、これらの過程において10代の親や片親、薬物乱用、精神衛生不良、低教育水準、失業は珍しくない（Bebbington & Miles, 1989; Bhatti-Sinclair & Sutcliffe, 2012; Crozier & Barth, 2005; Franzen, Vinnerljung, & Hjern, 2008; Simkiss, Stallard & Thorogood, 2012）。一般集団の子どもについての研究も、こうした経験が貧しい教育成果を生むリスク因子であることを示している（例：Goodman & Gregg, 2010; Sylva et al., 2014）。そのため、里親あるいは親族のケアを受けることの影響を調査するには、一般的リスク因子よりもケアを受ける子どもに関連性の高いリスク因子を考慮しなくてはならない。そうしなければ、ケアを受けることと教育成果の関係は、測定されていない重要な要因によって混乱する可能性がある。

ケアを受ける子どもに特に関連性が高い因子の把握

5つの研究が、ケアを受ける子どもに関連性が高い因子を考慮することで、上で認識された限界を乗り越えることを試みている。それは変数を制御することや、里親や親族のケアを受ける子どもを、同様の不利益を抱える子どもと比較することで行われている。

McClung and Gayle (2010) は、2つの自治体のコミュニティで、ケアを受ける子どもと、社会サービス支援を受けて実親と生活する子どもを比較した。ケアを受ける子どもは対照群よりも、優れた教育成果があったことを結果は示した。

Kortenkamp and Ehrle (2002) は、ケアを受ける子ども、実親と住んでいるが高リスクにあると思われる子ども、一般集団の子どもの、退学を含む心理的成果を比較するために、全国レベルの大規模な子どもの代表サンプルを使用した。ケアを受ける子どもと、高リスクにある子どものサンプルは、同程度の高い退学率であり、一般集団の子どもよりも高いことを結果は示した。

Weiss and Fantuzzo (2001) は、数多くの生得的リスク、貧困、マルトリートメント（不適切な養育）を考慮した後でも、ケアを受けることは貧しい教育成果と出席（ただし留年ではない）に関係があることを発見した。この研究はさらに、こうした因子がケアを受ける子どもと、ケアを経験したことがない子どもに、等しく影響を与えているかどうかを検討し、差異が存在しないと示唆する有意な相互作用を発見することはなかった。しかしながら、関連リスク因子の経験がありケアを受けている子どものサンプルは、極めて小規模であるために、確固とした発見ではないかもしれないと著者は示唆している。

Smithgall, Gladden, Howard, Goerge and Courtney (2004) の研究では、ケアを受ける子どものサンプルの約半分が、読解力のスコアにおいて下位4分の1に位置する成績となった。この結果は、永続的ケア措置に置かれている子どもに類似しており、マルトリートメント（不適切な養育）を経験し不利益を被っているが、ケア対象下に置かれていない子どもよりは良いものとなっている。研究はまた、教育的達成格差は年齢が上がるにつれて広がることも発見した。しかしながら年齢、人口統計学、学校の因子が

考慮されると、群の間の達成の差異は半減する。そのため、低い学業成績の原因は、部分的にはマルトリートメント（不適切な養育）、人種間不平等、貧困、ケアを受ける子どもが学力不振校に在籍していることに求めることができると著者は示唆している。しかしながら、こうした分析においても、ケアを受けることは低い成果に結びつけられている。

Fantuzzo and Pearlman (2007) の研究では、ケアを受ける子どもは停学処分を受けやすい傾向にあり、ジェンダー、民族性、貧困、実親家庭のリスクの存在の制御後でも、計算や読み書きの成果は全般的に低いものとなっている。しかしながら、それ以外の3つの教育成果や、出席、留年においては、ケアを受けることは低成績のリスク因子ではなかった。この研究はまた、ケアを受けることと、4つの読み書き・計算能力の成果および退学の間に関係に、マルトリートメント（不適切な養育）が部分的に影響していることも発見した。このことはマルトリートメント（不適切な養育）が考慮されると、ケアを受けることと教育成果の関係が弱まることを意味している。いくつかの成果については、マルトリートメント（不適切な養育）が考慮されると、ケアを受けることと教育成果の関係は消滅する。

こうした発見の示唆は、本調査にとって重要である。なぜならケアを受けることと低い教育成果の関係は、他の重要な因子によって部分的に説明されることを示唆しているからである。こうした因子には貧困やマルトリートメント（不適切な養育）といったケアに先行する経験が含まれ、教育上の困難はケアを受けることに先立っているかもしれない可能性を示唆している。しかしながらこの研究は横断的なものであるため、ケアを受けることがマルトリートメント（不適切な養育）と教育成果の関係を媒介するといった、別の説明を除外することができない。このことは、ケアを受けることは、マルトリートメント（不適切な養育）を経験した子どもが直面する、教育上の困難を悪化させるということを含意している。

こうした研究は、数多くの因子が考慮された後でも、ケアを受けることは貧しい教育成果のリスク因子であり続けることを示唆している。しかしながらケアを受けることと教育成果の関係は、他の因子が考慮されると弱まるように思われる。McClung and Gayle (2010) の研究では、他の因子が考慮された後では、ケアを受ける子どもの方が実親の元にいる子どもよりも成績が良好であるように思われるのだ。

この関係をさらに弱める、上述の研究では取り上げられていない他の因子が存在する可能性がある。たとえば、ケアを受ける子どもの成果を説明する上で、両親の教育水準は重要な役割を担っている可能性がある。さらに、ケアを受ける子どもと、実の家族の元にとどまる子どもを比較することには、他の点についてどれほど類似点があっても限界がある。上記の研究は全て横断的なものであり、ある特定の時点での子どもの成果に着目している。そのためケアを受けるようになった時点での成績がどのようなものであったか、あるいは時間とともにどのように進展したかは知られていないのである。そのため上記の結果についての異なる説明を除外することはできない。

学業成績の経時的検討

1978年に Fanshel and Shinn は、子どもがケアを受けるようになってから6ヶ月後の、多様な成果における里親養育の効果は多くが肯定的なものであり、これらが長期にわたり維持されることを発見した (Fanshel & Shinn, 1978)。経時的教育成果に目を向けた研究は、ケアを受けることと教育成果の関係を検討する今までとは別の研究の方向性を示してしている。ケアを受けることの心理社会的成果への影響を評価するには、経時的進展を検討する必要がある、と Forrester は論じた (Forrester et al., 2009; Forrester, 2008)。こうした分析は子どもの教育曲線を説明し、ケアを受ける場合、あるいは受けない場合に、想定された進展をたどるかどうかを浮き彫りにする可能性がある。

Barber & Delfabbro (2005)、Conger and Rebeck (2001) および Heath, Colton and Aldgate (1994) は、ケアを受ける子どもの教育成果を経時的に検討している。

Barber and Delfabbro (2005) は2年にわたって子どもを追跡したが、教育成果に関するデータ（この事例では出席と退学）は、4ヶ月後のフォローアップについてのみ入手可能である。それらは、措置直後の4か月間に、四半期ごとの退学率の中央値が低下し、出席が増えたことを示している。しかし、この研究は対照群を含んでいないため、そのことがケアの措置に結びついているのか、想定内の児童発達および行動であるかを判断することは不可能である。さらに4ヶ月というフォローアップ期間は短く、措置自体の効果ではなく、ケア以前の経験や混乱への反応を反映している可能性がある (Waldfogel, 2000)。

Conger and Rebeck (2001) の研究では、里親および親族によるケアを受ける子どもの、措置前の学期と措置後の学期における、テストのスコアと出席が検討された。子どもがケアを受けるようになってから、出席率は全般的に上昇したことを結果は示しているが、一般集団の子どもの平均値よりも低い値にとどまっている。措置の種類によって数字が分析されると、養護施設にある子どもの出席は統計的に有意に低下することをそれらは示した。里親および親族によるケアを受ける児童において値は上昇するものの、人口統計学的因子が制御されると統計的に有意ではなくなった。この研究は、ケアを受けることの効果の測定を目指しているわけではない、と明示的に記されていることには注意が必要である。

Heath et al. (1994) は、似たような子どもの対照群を含む唯一の縦断的研究である（親と住み、コミュニティで支援を受けている58名の子ども）。長期におよび里親養育にあった49名の子どもの教育成果が、3つの時点で検討されている。第1のアセスメントはケアを受けるようになった時点ではなく、研究開始時点のものであり、その時点で多くの若者はケアを受けるようになって数年が経っていた。そのため、子どもがケアを受けるようになった時点での行動は知られていない。ここでの結果は、同年代の子どもと比べても、子どもは進歩しているが追いつくことはなく、そのためコミュニティ内のケアを受ける子どもとリスクのある子どもの間の教育的達成格差は残り続ける。この研究のサンプルは小規模であり、それゆえ結果の解釈は慎重を要する。例えば、小さくても実際に存在する効果が確認されず、ランダム効果が誇張される可能性がある。

これらの研究から得られた結果は、本調査にとって有益であるが限定的である。実際それらは、ケアを受けるようになった後、および経時的に成果がどのように変化しうるかを示しており、子どもが進歩することができることを示唆している。しかしながら、適切な対照群ならびに長期フォローアップがないために、里親養育を受けることの効果であるのか、他の介入の効果であるのか、あるいは想定内の進歩の反映に過ぎないのか判断することは不可能である。

因果関係を追求する他の方法論

これまで本調査は、ケアを受ける子どもの教育成果と一般集団の子どもの比較する研究、子どもの個々の特徴を制御する研究、ケアに関連する因子を考慮する研究、縦断的設計を備えた研究について論じてきた。これらの研究は本調査の主要研究課題、つまり子どもの教育成果にとってケアは有害であるか、という問いにとって適切である一方で、数多くの研究が、ケアを受けることの成果への影響の評価を具体的かつ明示的に目的とし、より複雑かつ洗練された設計を採用している。本調査のためにこうした研究が4つ確認された。

Font and Maguire-Jack (2013) は2つの時点における子どもの4つのサンプルの教育成果を比較した。

(1) マルトリートメント（不適切な養育）を経験しているが、自宅に住んでいる子ども、(2) 最初の時点（T1）では自宅に住んでいたが、第2の時点（T2）ではケアを受けていたマルトリートメント（不適切な養育）を経験した子ども、(3) T1でケアを受けていたが、T2で自宅に住んでいたマルトリートメント（不適切な養育）を経験した子ども、(4) いずれの時点でもケアを受けていた子ども。成果はT2で測定された。この研究は傾向スコアマッチング³を伴う回帰分析を補足した。どちらの方法論も似たような結果となっている。どちらの時点においてもケアを受けていた子どもはT2において、ケアから自宅に戻った子どもと、いずれの時点においてもケアを受けていなかった子どもと同様な学業成果となった。2つの時点の間でケアを受けるようになった子どもは、T2の時点でより良い認知的および情動的関わりを学校で見せた。子どもが報告する学業成績については、いずれの群の間にも差異は見られなかった。ケアを受けるようになって、情動的・認知的関わりが刺激された可能性がある、と著者は示唆しているが、時間の経過とともに維持されなくなる。このことは、どちらの時点でもケアを受けていた子どもは、T1とT2の間にケアを受けるようになった子どもよりもT2の時点で低水準の関与を示したことによって示されている。

3 定義と詳細については、付録2の用語集を参照。

Berger, Bruch, Johnson, James and Rubin (2009) は、選択バイアスを軽減するために方法論の厳密性を高めた、横断的および縦断的分析を行った。選択バイアスとは、測定される成果に影響を及ぼしうる、対照集団間の体系的差異のことである。ケアを受ける子どもは、児童サービスと交流があった子どもと比較され、さらに子どもの実親家族、環境リスク、ケアに先行する状況といった、子どもに関係する様々な制御変数が用いられた。各方法論は似たような結果を生み出しており、ケアを受ける子どもの学業成績はケアを受けない子どものそれと変わらないものとなっている。

Berger, Cancian, Han, Noyes and Rios-Salas (2015) は大規模な全国からの子どもの代表サンプルを用いて、ケアを受けることが3学年から8学年までの算数と読解力のスコアに与える影響を検討した。回帰分析を用いて、何らかの福祉支援を受ける一般集団の若者よりも、ケアを受ける子どもの成績が悪いことを発見した。この関係は、以前の学業成績を考慮に入れると若干弱まり、子どもの性質、ケア以前の状況、出席、原級留置、ケア以前の社会経済的地位、その他の家庭リスク因子といった制御がすべて含まれると完全に消滅した。さらに、テストの時点でケアを受けていた子どもの読解力のスコアは、テスト前に自宅へ戻った若者のスコアと変わらず、テスト後にケア対象下に置かれた若者のスコアよりも若干高かった。数学については、ケアを受けている子どものスコアは、一般集団の子ども、あるいは後になってケア対象下に置かれた若者のスコアと変わらず、テストの前にケアから自宅に戻った若者のスコアよりも若干高かった。分析を押し進めると、ケアを受けるようになった直後、あるいは短期措置対象下だけに置かれる際に、子どもの学業成績が低下することが判明した。

本調査のために確認された最後の論文は、ブリティッシュコロンビア州の16歳から18歳の少年が高校を卒業する可能性に、ケア対象下に置かれることが与える影響を評価するために、計測変数手法を用いたものである (Warburton, Warburton, Sweetman, & Hertzman, 2014)。計測変数⁴手法は、経済学から借用された複雑な統計技術であり、その目的は選択バイアスをさらに減らすことである。この研究の結果は、ケア対象下に置かれていない若者と比べると、ケア対象下に置かれていることは高校卒業を遅らせる、あるいは卒業の可能性を低下させることを示している。

4 定義と詳細については、付録2の用語集を参照。

結果の要約

本稿には、全部で 28 の研究が含まれている。教育成果へのケアの影響を評価するために、本調査は選択バイアスを最小限に抑える努力をした研究を特定した。そうすることで、こうした研究は以下を分離しようと試みている。(a) 子どもの個人的特徴（例：SEN）からケアの影響を分離、(b) ケアに先行する不利益。質的研究を概観すると、サンプル、文脈、方法論が異なるため、研究結果を直接比較することは不可能である。

本調査に含まれた研究は、ケアを受ける子どもとその同年代の子どもの間には達成格差があるが、ほかの因子が考慮されるとケアを受けることと教育成果の関係が弱まることを示している。全体的に、ケアを受ける子どもが、社会サービスと交流している子どもと同等の学力となっているかどうかについてのエビデンスは、入り混じったものとなっている。関連リスク因子が考慮されると、ケアを受ける子どもの学業成績が他の子どもと変わらないことを発見した研究も存在する (Font and Maguire-Jack, 2013 and Berger et al., 2009)。他の研究は、それと関係なく格差が残ることを発見している。たとえば Berger et al. (2015) および McClung and Gayle (2010) は、自宅にとどまる子どもよりも、ケアを受ける子どもの成績が良いことを発見した。しかし、選択バイアスを軽減するためにしっかりとした手法を使用した Warburton et al. (2014) は、ケアを受ける子どもの成績の方が悪いことを発見している。合わせてこうした結果は、ケアを受ける前に子どもが直面した、困難およびそうした経験が成果に及ぼす効果を強調している。

全体として、里親または親族のケアを受けることと、教育成果の間には相関関係があることを本調査は発見したが、この関係は部分的には数多くの個人、家庭、環境リスク因子によって説明される。里親養育にある若者は、ケアを受けない同年代の子どもよりも高校を卒業しない可能性が高いことを発見した研究が 1 つあるが (Warburton et al., 2014)、数多くのしっかりとした研究は、こうした因子が考慮されるとケアを受ける子どもの学業成果は、同年代の子どもと変わらないことを発見している。ケア制度が貧しい教育成果を引き起こすという明らかなエビデンスは少ししかない。ほんの少し、もしそのような研究があったとしても、強い因果推論を行う上で十分な規模と方法論を備えている研究はごく少数である。

本調査の結果は何を意味するか？

本調査は、ケアを受ける子どもの、貧しい教育成果の原因のいくつかを追求する、という幅広い関心から生まれている。里親あるいは親族のケアを受けることが、教育成果にもたらす影響を調査することで、研究に貢献することが目指された。

結果は、里親あるいは親族のケアを受ける子どもと、ケアを受けない子どもの学業成績は大きく変わらないことを示しており、里親制度が貧しい成果の原因となっている可能性が低いことを示唆している。ケアを受ける子どもが、家族と生活する同年代の子どもよりも成績が悪いことを発見したのは、Warburton et al. (2014) のみである。著者は、ケア制度はこうした若者たちのニーズに応えることができない、と結論づけている。このことは、教育上の進歩を阻害する、数年に及ぶマルチリートメント（不適切な養育）やその他の経験を軽減するには、ケアを受けるだけでは不十分であることを示唆している。より多くの時間、あるいはより重点的サービスやサポートが要求されるのかもしれない。研究はまた、子どもがケアを受ける間に直面する、安定しない措置などの、子どもの教育的成功を阻害する可能性がある多くの困難を記録している（例：Ward, 2009）。

本調査は、ケアを受ける前の経験が、教育成果を予測する上で担う重要な役割を浮き彫りにしている。貧困（例：Feinstein, 2003）、マルチリートメント（不適切な養育）（例：Leiter & Johnsen, 1994）、

およびその他のリスク因子の重要な影響を、多くの研究が記録しているので、これは驚くことではない。ケアを受ける子どもの、ケアを受ける前の経験についての情報を含むことで、ケア制度が取り組むべき社会問題の重要な側面も研究は強調している。実務家や政策立案者が子どものためのサービスを形成する上で、このことは重要となる。

里親養育にあることが、子どもの芳しくない教育成果の原因であるとするエビデンスは、限定的であることを本調査は発見した。

この結論は、幼年期および家庭体験に内在する過程、およびその後の生活状態の、成果との関係を理解することに、より多くの注意を払うべきだと論じた、Wolkind and Rutter (1973) などの歴史的研究を含む、その他の研究の結果と一致している。

2006年に、ケアを受ける子どもの成果についての、英国政府による声明への応答として、Steinはこう記した。「ケアが6万人の若者を見捨てている、という単純極まりない見解はゴミ箱に送られるべきだ」。

この主張は本調査の結果によって支持されている。

ケアを受けることによる、教育成果への影響を評価することは、単純な課題ではない。研究サンプルおよび対照群、利用可能なデータと方法論に、結果は大きく影響される。

含まれた研究の多くが、教育を含むケアに先行する重要な経験についてのデータの欠損に悩んでいる。先述の通り、ケアに先行する経験は、教育成果の重要な予知因子であり、ケアの影響を取り出そうとする際には、それらを考慮しなくてはならない。この結果は、研究のためのデータ生成、および低い学業成績のリスク因子の理解双方に関して、実践にとっても同じくらい重要である。

「ケア」という概念が、様々な研究で一貫して使用される可能性は低い。それは同質的な経験ではない。ケアのエピソードの長さ、目的、範囲は、アセスメントと一時的な措置から「永続的居場所」の提供まで、目的により様々である。ある程度の時間が過ぎた後、多くの子どもが自宅へと戻り (Thoburn, 2010; Wilson, 2006)、中にはケアから養子縁組される子どももいる。措置の目的は時間とともに変化し、常に明らかではなく、個々の子どものニーズや文脈にしたがって変化する。子どもの中には何度もケアを受けたり、離れたりする者もいれば、ケアを離れることなく複数の措置を経験する者もいる (Thoburn, 2010)。子どもがケアを受ける年齢やその理由も様々であり、多くが数多くの目標を定めた介入 (例: 個人指導) を受け、そのことは成果に影響を及ぼす可能性がある。対象に含まれた研究では、たとえば法律を参照することにより、「里親養育」が厳密に定義づけられることは稀である。ここでは、里親および親族によるケアの定義は幅広いものとなっているが、より厳密な定義を提供する将来の研究と文献調査は、本調査とは異なる発見を生み出す可能性がある。

子どものケアの歴史は複雑であり、ケアを受ける目的は個人によって異なる。そのため、全体的、平均的な影響を評価することには重大な限界がある。Warburton et al. (2014) は、比較的均質なサンプルを用いた唯一の研究である。確かに、年齢、ケアを受けるようになった年齢、ジェンダー、ケアを受けるようになった理由は、このサンプルでは類似している傾向にある。さらに、この研究で若者に提供される支援とサービスの種類も、年齢層の幅広いサンプルのものよりも均質な傾向にある。他の研究が、類似した戦略を採用したり、サブグループ分析を行っていたら、同じような結果となったかもしれない。

第2に、たとえば Forrester et al. (2009) のように、その他の生活状態の成果を含み、その他の重要な心理学領域における、ケアを受けることの否定的 (あるいは肯定的) 結果の特定から、他の研究と矛盾しない研究とは異なり、本調査は教育成果のみに目をむけている。実際、Forrester et al. (2009) は、ケアを受けることは子どもにとって有益であるかもしれないと発見している。他の数多くの研究から得られた結果は、行動上の問題 (Berger et al., 2009)、非行、緊急医療のエピソードやその後の貧困という成果 (Doyle, 2013; Warburton et al., 2014) について、ケアの有害な影響を示唆してきた。

結論

本調査は、系統的調査の原則を使用して、教育成果へのケア制度の影響を探求し、ケアを受けることと教育成果の間には関係があるか、関係の本質はどのようなものか、因果関係のエビデンスは存在するかを問いた。本調査は、この2つの間には強力な相関性が見られるものの、ジェンダー、特別教育のニーズ、民族性といった個人の特徴を考慮に入れると、この関係は薄まることを発見した。さらに、ケアを受ける若者に関連性の高いリスク因子が考慮され、選択バイアスを除去することを目指す方法論が採用されると、ケアを受けることは子どもの学業成績にとって有害ではないようである、とエビデンスは示唆しているように思われる。この例外は、カナダにおいて16歳でケアを受けることになった若者たちである。彼らが高校を卒業する可能性は、ケアを受けない子どもよりも低くなっている。本調査はまた、ケアを受ける前に子どもが経験する困難、およびそれらがどのように成果に影響を与えるかを浮き彫りにしている。結果は、ケアを受ける子どもの貧しい成果は、個人の特徴とケアに先行する経験、そして場合によっては措置が不安定である等のケアでの経験の、複雑な組み合わせの結果である可能性を示唆している。本稿では、この点は追求されていない。

本調査は、ケア制度の影響およびそれが提供される子どものニーズへの応答に関心を持つ人々にとって、関係性があるものとなっている。より多くの、あるいはより少ない子どもがケアされるべきである、と主張するものではない。ケアを受けることは、子どもの教育にとって有害であるとは思えないとする発見は、より多くの子どもがケアを受けるべきである、と論じるために使用されるべきではない。そうではなく、短期的に、そして自立するようになった後も長期的に成功できるようにするため、ケアを受ける人々を助けるためにより多くのニーズが満たされるべきである。

政策、実践への提言

概して、ケアが子どもの教育にとって有害であるとは思えないという結果からは、子どもの成長を可能とするサービスを提供する、積極的な戦略に努力を集中させるべきである。たとえば、Liabo et al. (2012) および Forsman and Vinnerljung (2012) にある、介入を参照されたい。定性研究も、成功し、たとえば大学に進学したケアを受ける子どもの数多くの例を記録している (Martin & Jackson, 2002)。

本調査は、ケアを受けることが、教育成果にとって有害であるとするエビデンスをほとんど発見しなかったが、その一方で、たとえばケア前の経験の影響を緩和することによって、ケアを受けることが子どもの学業に良い効果を与えるとも思えないことに光を当てている。実際、多くの不利益が考慮された後で、ケアを受ける子どもが同年代の子どもよりも成績が良いことを発見した研究はわずか1つだけであった (McClung & Gayle, 2010)。このことを、研究者、実務家、政策立案者は懸念すべきである。Krebs and Pitcoff (2004, p. 365) は、「里親養育制度は、保護している [若者の身に] 起こることに全責任を負わなくてはならず」、ならびに成功する機会を若者に与える責任をケア制度が持つことが重要である、と喚起している。

将来の研究への提言

ケアを受けることが、教育成果に与える影響を推定することは、簡単な作業ではない。研究サンプルおよび対照群、利用可能なデータと方法論に、結果は大きく影響される。

ケアを受けることが、教育成果に与える影響を推定することを目指す将来の研究は、可能な限り、より均質的なサンプル、適切な対照群、何らかの因果推論を可能とする方法論を用いるべきである。研究は、できるだけ詳しく、サンプル内の子どもと若者の異なる経験や特徴を提供すべきである。それによって、教育成果へのその他の潜在的な原因について、判断できるようになる。ケアを受けるようになった時点でのベースラインアセスメントを伴う縦断的データ、ならびに長期フォローアップを使用する研究も必要である。これらは成果が、ケアを受けるようになったことによる混乱の影響がないようにするために重要である。

研究の多くが、教育を含むケアに先行する重要な経験についての、データの欠損に悩んでいる。マルトリートメント（不適切な養育）など、ケアに先行する経験の多くは、教育成果の重要な予想される因子であり、ケアを受けることの影響を取り出そうとする際には、それらを考慮しなくてはならない。この結果は、研究のためのデータ生成、および低い学業成績のリスク因子の理解双方の観点から、実践にとっても同じくらい重要である。

References

- AIHW. (2007). Educational outcomes of children on guardianship or custody orders (No. 42). Canberra.
- AIHW. (2011). Educational outcomes of children on guardianship or custody orders: a pilot study (No. 49). Canberra. Retrieved from <http://ro.uow.edu.au/ihmri/393/>
- Australian Government: Australian Institute of Family Studies. (2014). Children in care. Retrieved from <http://www.aifs.gov.au/cfca/pubs/factsheets/a142092/>
- Barber, J., & Delfabbro, P. (2005). Children's adjustment to long-term foster care. *Children and Youth Services Review*, 27, 329-340. doi:10.1016/j.childyouth.2004.10.010
- Bebbington, A., & Miles, J. (1989). The Background of Children who enter Local Authority Care. *British Journal of Social Work*, 19(5), 349-368. doi:10.1093/bjsw/19.5.349
- Berger, L. M., Bruch, S., Johnson, E., James, S., & Rubin, D. (2009). Estimating the "impact" of out of home placement on child well being: approaching the problem of selection bias. *Child Development*, 80(6), 1856-1876. doi:10.1111/j.1467-8624.2009.01372.x
- Berger, L. M., Cancian, M., Han, E., Noyes, J., & Rios-Salas, V. (2015). Children's Academic Achievement and Foster Care. *Pediatrics*, 135(1), e109-116. doi:10.1542/peds.2014-2448
- Berridge, D. (2007). Theory and explanation in child welfare: education and looked-after children. *Child & Family Social Work*, 12(1), 1-10. doi:10.1111/j.1365-2206.2006.00446.x
- Berridge, D. (2012). Educating young people in care: What have we learned? *Children and Youth Services Review*, 34(6), 1171-1175. doi:10.1016/j.childyouth.2012.01.032
- Bhatti-Sinclair, K., & Sutcliffe, C. (2012). Challenges in Identifying Factors Which Determine the Placement of Children in Care? An International Review. *Child and Adolescent Social Work Journal*, 30(4), 345-363. doi:10.1007/s10560-012-0293-x
- Blome, W. W. (1997). What happens to foster kids: Educational experiences of a random sample of foster care youth and a matched group of non-foster care youth. *Child & Adolescent Social Work Journal*. Vol 14(1), 14, 41-53. doi:10.1023/A:1024592813809
- Buehler, C., Orme, J. G., Post, J., & Patterson, D. A. (2000). The long-term correlates of family foster care. *Children and Youth Services Review*. doi:10.1016/S0190-7409(00)00108-0
- Burley, M., & Halpern, M. (2001). Educational Attainment of Foster Youth: Achievement and Graduation Outcomes for Children in State Care. Olympia, Washington.
- Centre for Social Justice. (2015). FINDING THEIR FEET Equipping care leavers to reach their potential. London. Retrieved from [http://www.centreforsocialjustice.org.uk/UserStorage/pdf/Pdf reports/Finding.pdf](http://www.centreforsocialjustice.org.uk/UserStorage/pdf/Pdf%20reports/Finding.pdf)

- Conger, D., & Rebeck, A. (2001). *How Children's Foster Care Experiences affect their education*. New York City, NY.
- Connelly, G., & Chakrabarti, M. (2008). Improving the educational experience of children and young people in public care: a Scottish perspective. *International Journal of Inclusive Education*, 12(4), 347-361. doi:10.1080/13603110601156558
- Crozier, J. C., & Barth, R. P. (2005). Cognitive and academic functioning in foster children. *Children and Schools*, 27(4), 197-206. doi:10.1093/cs/27.4.197
- DfE. (2012). Government publishes destination data for the first time [News Page]. London. Retrieved from <https://www.gov.uk/government/news/government-publishes-destination-data-for-the-first-time>
- DfE. (2014a). Children looked after in England (including adoption and care leavers) year ending 31 March 2014.
- DfE. (2014b). Statistical First Release: Outcomes for Children Looked After by Local Authorities in England, as at 31 March 2014. London. Retrieved from https://www.gov.uk/government/uploads/system/uploads/attachment_data/file/191969/SFR32_2012Text.pdf
- Dill, K., Flynn, R. J., Hollingshead, M., & Fernandes, A. (2012). Improving the educational achievement of young people in out-of-home care. *Children and Youth Services Review*, 34(6), 1081-1083. doi:10.1016/j.childyouth.2012.01.031
- Dobbie, W., & Fryer, R. G. (2009). Are High Quality Schools Enough to Close the Achievement Gap? Evidence from a Social Experiment in Harlem (No. 15473). Cambridge, MA. Retrieved from http://www.nber.org/papers/w15473.pdf?new_window=1
- Doyle, J. J. (2013). Causal effects of foster care: An instrumental-variables approach. *Children and Youth Services Review*, 35(7), 1143-1151. doi:10.1016/j.childyouth.2011.03.014
- Fanshel, D., & Shinn, E. B. (1978). *Children in Foster Care: a Longitudinal Investigation*. Guilford: Columbia University Press.
- Fantuzzo, J., & Perlman, S. (2007). The unique impact of out-of-home placement and the mediating effects of child maltreatment and homelessness on early school success. *Children and Youth Services Review*, 29(7), 941-960. doi:10.1016/j.childyouth.2006.11.003
- Farruggia, S. P., Greenberger, E., Chen, C., & Heckhausen, J. (2006). Perceived Social Environment and Adolescents' Well-Being and Adjustment: Comparing a Foster Care Sample With a Matched Sample. *Journal of Youth and Adolescence*. doi:10.1007/s10964-006-9029-6
- Feinstein, L. (2003). Inequality in the early cognitive development of British children in the 1970 cohort. *Economica*, 70, 73-97.
- Fernandez, E., & Barth, R. (2010). *How Does Foster Care Work?: International Evidence on Outcomes*. London: Jessica Kingsley.
- Flynn, R. J., & Biro, C. (1998). Comparing developmental outcomes for children in care with those for other children in Canada. *Children & Society*, 12(3), 228-233. doi:10.1111/j.1099-0860.1998.tb00070.x

- Font, S., & Maguire-Jack, K. (2013). Academic engagement and performance: Estimating the impact of out-of-home care for maltreated children. *Children and Youth Services Review*, 35(5), 856-864.
- Forrester, D. (2008). Is the Care System Failing Children? *Political Quarterly*, 79(2), 206-211. doi:10.1111/j.1467-923X.2008.00927.x
- Forrester, D., Goodman, K., Cocker, C., Binnie, C., & Jensch, G. (2009). What is the Impact of Public Care on Children's Welfare? A Review of Research Findings from England and Wales and their Policy Implications. *Journal of Social Policy*, 38(03), 439. doi:10.1017/S0047279409003110
- Forsman, H., & Vinnerljung, B. (2012). Interventions aiming to improve school achievements of children in out-of-home care: A scoping review. *Children and Youth Services Review*, 34(6), 1084-1091. doi:10.1016/j.childyouth.2012.01.037
- Foster, E. M. (2010). Causal inference and developmental psychology. *Developmental Psychology*, 46(6), 1454-1480. Retrieved from <http://www.ncbi.nlm.nih.gov/pubmed/20677855>
- Franzen, E., Vinnerljung, B., & Hjern, a. (2008). The Epidemiology of Out-of-Home Care for Children and Youth: A National Cohort Study. *British Journal of Social Work*, 38(6), 1043-1059. doi:10.1093/bjsw/bcl380
- Geenen, S., & Powers, L. E. (2006). Are we ignoring youths with disabilities in foster care? An examination of their school performance. *The Social Worker*, 51(3), 233-241.
- Goddard, J. (2000). The education of looked after children. *Child and Family Social Work*, (5), 79-86. doi:10.1046/j.1365-2206.2000.00143.x
- Goodman, A., & Gregg, P. (2010). *Poorer Children's Educational Attainment: How Important are Attitudes and Behaviour?* York: Joseph Rowntree Foundation. Retrieved from <http://www.jrf.org.uk/publications/educational-attainment-poor-children>
- Gorard, S., Beng, H. S., & Davies, P. (2012). *The impact of attitudes and aspirations on educational attainment and participation.* York: Joseph Rowntree Foundation. Retrieved from <http://www.jrf.org.uk/sites/files/jrf/education-young-people-parents-full.pdf>
- Harris, M. S., Jackson, L. J., O'Brien, K., & Pecora, P. J. (2009). Disproportionality in education and employment outcomes of adult foster care alumni. *Children and Youth Services Review*, 31(11), 1150-1159. doi:10.1016/j.childyouth.2009.08.002
- Heath, A. F., Colton, M., & Aldgate, J. (1994). Failure to Escape: A Longitudinal Study of Foster Children's Educational Attainment. *British Journal of Social Work*, 24(3), 241-260. Retrieved from <http://search.ebscohost.com/login.aspx?direct=true&db=sih&AN=48023109&site=ehost-live>
- Iglehart, A. P. (1995). Readiness for independence: Comparison of foster care, kinship care, and non-foster care adolescents. *Children and Youth Services Review*, 17(3), 417-432. doi:10.1016/0190-7409(95)00026-9
- Jackson, S. (2007). Progress at Last? *Adoption & Fostering*, 31(1), 3-5. doi:10.1177/030857590703100101

- Jackson, S. (2013). Introduction. In S. Jackson (Ed.), *Pathways Through Education for Young People in Care* (pp. 1-8). London: British Association of Adoption and Fostering (BAAF).
- Jackson, S., & McParlin, P. (2006, February). The education of children in care. *The Psychologist*, 19(2), Vol 19 No 2.
- Jaffee, S. R., Strait, L. B., & Odgers, C. L. (2012). From correlates to causes: can quasi-experimental studies and statistical innovations bring us closer to identifying the causes of antisocial behavior? *Psychological Bulletin*, 138(2), 272-95. doi:10.1037/a0026020
- Knorth, E. J., Harder, A. T., Zandberg, T., & Kendrick, A. J. (2008). Under one roof: A review and selective meta-analysis on the outcomes of residential child and youth care. *Children and Youth Services Review*, 30(2), 123-140.
- Kortenkamp, K., & Ehrle, J. (2002). *The Well-Being of Children Involved with the Child Welfare System: A National Overview*. The Urban Institute, B(43).
- Krebs, B., & Pitcoff, P. (2004). Reversing the Failure of the Foster Care System. *Harvard Women's Law Journal*, 27(2).
- Leiter, J., & Johnsen, M. C. (1994). Child Maltreatment and School Performance. *American Journal of Education*, 102(2), 154-189.
- Liabo, K., Gray, K., & Mulcahy, D. (2012). A systematic review of interventions to support looked-after children in school. *Child & Family Social Work*, 1-13. doi:10.1111/j.1365-2206.2012.00850.x
- Martin, P., & Jackson, S. (2002). Educational success for children in public care: advice from a group of high achievers. *Child & Family Social Work*, 121-130. Retrieved from <http://onlinelibrary.wiley.com/doi/10.1046/j.1365-2206.2002.00240.x/full>
- McClung, M., & Gayle, V. (2010). Exploring the care effects of multiple factors on the educational achievement of children looked after at home and away from home: an investigation of two Scottish local authorities. *Child & Family Social Work*, 15(4), 409-431. doi:10.1111/j.1365-2206.2010.00688.x
- Mitic, W., & Rimer, M. (2002). The Educational Attainment of Children in Care in British Columbia. *Child & Youth Care Forum*, 31(6), 397-414. doi:10.1023/A:1021158300281
- Mulcahy, M., & Trocme, N. (2010). *Children and Youth in Out of Home Care in Canada (Information Sheet #78)*. Montreal, QC: Centre for Research on Children and Families, McGill University. Retrieved from <http://cwrp.ca/sites/default/files/publications/en/ChildrenInCare78E.pdf>
- O' Higgins, A., Sebba, J., Gardner, F. & Luke, N. (forthcoming). What are the factors associated with educational achievement for children in kinship or foster care? A systematic review.
- Pearl, J. (2009). *Causality: Models, Reasoning and Inference* (second edition.). New York City, NY: Cambridge University Press.

- Pears, K. C., Fisher, P. A., Bruce, J., Kim, H. K., & Yoerger, K. (2010). Early elementary school adjustment of maltreated children in foster care: the roles of inhibitory control and caregiver involvement. *Child Development*, 81(5), 1550-64. doi:10.1111/j.1467-8624.2010.01491.x
- Pears, K. C., Kim, H. K., Fisher, P. A., & Yoerger, K. (2013). Early School Engagement and Late Elementary Outcomes for Maltreated Children in Foster Care. *Developmental Psychology*, 49(12), 2201-2211. doi:10.1037/a0032218
- Pecora, P. J. (2012). Maximizing educational achievement of youth in foster care and alumni: Factors associated with success. *Children and Youth Services Review*, 34, 1121-1129. doi:10.1016/j.childyouth.2012.01.044
- Rees, P. (2013). The mental health, emotional literacy, cognitive ability, literacy attainment and “resilience” of “looked after children” : A multidimensional, multiple-rater population based study. *The British Journal of Clinical Psychology/the British Psychological Society*, 52(2), 183-98. doi:10.1111/bjc.12008
- Sawyer, R. J., & Dubowitz, H. (1994). School performance of children in kinship care. *Child Abuse & Neglect*, 18(7), 587-97. Retrieved from [http:// www.ncbi.nlm.nih.gov/pubmed/7522940](http://www.ncbi.nlm.nih.gov/pubmed/7522940)
- Scherr, T. G. (2007). Educational Experiences of Children in Foster Care: Meta-Analyses of Special Education, Retention and Discipline Rates. *School Psychology International*, 28(4), 419-436. doi:10.1177/0143034307084133
- Simkiss, D. E., Stallard, N., & Thorogood, M. (2012). A systematic literature review of the risk factors associated with children entering public care. *Child: Care, Health and Development*, 1-15. doi:10.1111/ cch.12010
- Sinclair, I. (2006). Residential care in the UK. In C. McAuley, P. J. Pecora, & V. Rose (Eds.), *Enhancing the Well-being of Children and Families through Effective Interventions: International Evidence for Practice* (pp. 203-216). London: Jessica Kingsley.
- Sinclair, I. (2010). What Makes for Effective Foster Care: Some Issues. In E. Fernandez & R. P. Barth (Eds.), *How Does Foster Care Work? International Evidence on Outcomes*. London: Jessica Kingsley.
- Smithgall, C., Gladden, R. M., Howard, E., Goerge, R., & Courtney, M. (2004). *Educational Experiences of Children in Out-of-Home Care*. Chicago: Social Exclusion Unit. (2003). *A better education for children in care*. London: Social Exclusion Unit - Office of the Deputy Prime Minister.
- Stein, M. (2006, December). Wrong turn. The consensus that children in care are failing, and that the system is to blame, is plain wrong. *The Guardian*. London. Retrieved from <http://www.theguardian.com/society/2006/dec/06/childrenservices.guardiansocietysupplement1>
- Sylva, K., Melhuish, E., Sammons, P., Siraj, I., Taggart, B., Smees, R., ... Hollingworth, K. (2014). Students' educational and developmental outcomes at age 16 Effective Pre-school, Primary and Secondary Education (EPPSE 3-16) Project. London: Department for Education. Retrieved from [https:// www.gov.uk/government/uploads/system/uploads/attachment_data/file/351496/RR354_-_Students__educational_and_developmental_outcomes_at_age_16.pdf](https://www.gov.uk/government/uploads/system/uploads/attachment_data/file/351496/RR354_-_Students__educational_and_developmental_outcomes_at_age_16.pdf)
- Thoburn, J. (2010). International Perspectives on Foster Care. In E. Fernandez & R. P. Barth (Eds.), *How Does Foster Care Work? International Evidence on Outcomes* (pp. 29-43). London: Jessica Kingsley.

- Tordön, R., Vinnerljung, B., & Axelsson, U. (2014). Improving foster children's school performance: a replication of the Helsingborg study. *Adoption & Fostering*, 38 (1), 37-48. doi:10.1177/0308575913518003
- Townsend, M. (2012). Are we making the grade? The Education of Children and Young People in Out-of-Home Care. Retrieved from http://www.community.nsw.gov.au/docswr/_assets/main/lib100047/education_oohc_report.pdf
- Trout, A. L., Hagaman, J., Casey, K., Reid, R., & Epstein, M. H. (2008). The academic status of children and youth in out-of-home care: A review of the literature. *Children and Youth Services Review*, 30(9), 979-994. doi:10.1016/j.chilyouth.2007.11.019
- Turpel-Lafond, M. E. (2007). Health and Well-Being of Children in Care in British Columbia: report 2 on Educational Experience and Outcomes.
- U.S. Department of Health and Human Services Administration for Children and Families. (2015). The AFCARS Report. The AFCARS Report. Children's Bureau. Retrieved March 21, 2015, from <http://www.acf.hhs.gov/sites/default/files/cb/afcarsreport21.pdf>
- Vinnerljung, B., Tideman, E., Sallnäs, M., & Forsman, H. (2014). Paired Reading for foster children: results from a Swedish replication of an English literacy intervention. *Adoption & Fostering*, 38(4), 361-373. doi:10.1177/0308575914553543
- Waldfoegel, J. (2000). Child welfare research: How adequate are the data? *Children and Youth Services Review*, 22(9-10), 705-741. doi:10.1016/S0190-7409(00)00112-2
- Warburton, W. P., Warburton, R. N., Sweetman, A., & Hertzman, C. (2014). The impact of placing adolescent males into foster care on education, income assistance, and convictions. *Canadian Journal of Economics*, 47(1), 35-69.
- Ward, H. (2009). Patterns of instability: Moves within the care system, their reasons, contexts and consequences. *Children and Youth Services Review*, 31(10), 1113-1118. doi:10.1016/j.chilyouth.2009.07.009
- Weiss, A. D. G., & Fantuzzo, J. W. (2001). Multivariate impact of health and caretaking risk factors on the school adjustment of first graders. *Journal of Community Psychology*, 29(2), 141-160. doi:10.1002/1520-6629(200103)29:2<141::AID-JCOP1010>3.0.CO;2-6
- Whittaker, J. K. (2006). Residential Care in the US. In C. McAuley, P. J. Pecora, & V. Rose (Eds.), *Enhancing the Well-being of Children and Families Through Effective Interventions* (pp. 217-227). London: Jessica Kingsley.
- Wilson, K. (2006). Foster Family Care in the UK. In C. McAuley, P. J. Pecora, & V. Rose (Eds.), *Enhancing the Well-being of Children and Families Through Effective Interventions* (pp. 172-186). London: Jessica Kingsley.
- Wolkind, S., & Rutter, M. (1973). Children who have been "in care" --an epidemiological study. *Journal of Child Psychology and Psychiatry, and Allied Disciplines*, 14(2), 97-105. Retrieved from <http://www.ncbi.nlm.nih.gov/pubmed/4731013>

Appendix 1:

Table of included studies

Study	Participants	Methodology	Data source	Results
Australian Institute of Health and Welfare(2007), Australia	895 children in care, age 8 to 12, compared test scores of children in general population	T-test, ANOVA	Administrative database	Children in care had lower mean scores in literacy and numeracy.
Australian Institute of Health and Welfare(2011), Australia	4673 children in care, age 8 to 12, compared test scores of children in general population	T-test, ANOVA	Administrative database	Children in care had lower mean scores in literacy and numeracy.
Barber & Delfabbro(2005), Australia	236 children entering care, age 4 to 17, no comparison group	T-test	Social worker survey and case file reviews	Mean attendance rate per quarter improved at four months follow up.
Berger, Bruch, Johnson, James & Rubin (2009), USA	2453 children in care, age 4 to 17, comparison group children in contact with children' s services	Linear regression, residualised change, simple change, difference in difference and fixed effects model.	Administrative database	No significant differences in test scores between children in care and comparison group with any method.
Berger, Cancian, Han, Noyes & Rios-Salas (2015), USA	222 049 total: children in care, age 4 to 17, comparison group children in contact with social services	Linear regression	Administrative database	No significant differences in test scores between children in care and comparison group.
Burley & Halpern (2001), USA	4,559 children in care, age 8 to 14, compared to test scores of children in general population	Linear regression	Administrative database	Children in care score 16 to 20 percentile points below peers. When covariates are included, this reduces to 7 to 8 percentile points.
Conger & Rebeck (2001), USA	16 183 children in care, age 8 to 13, no comparison group	Linear regression	Administrative database	Attendance decreases after placement for children in residential care, no change for children in foster or kinship care.
Heath, Colton & Aldgate (1994), England	49 children in care, age 8 to 14, comparison group 58 children in contact with children' s services	T-test, ANOVA	Test scores and interviews with children, teachers and social workers	Children' s test scores improve over time, but gap with peers remains.
Fantuzzo & Perlman (2007), USA	355 children in care, age 7-8, comparison group 11 480 children in the same local authority, including maltreated children not in care	Logistic regression and mediation analysis	Administrative database	Children in care had lower test scores on literacy language, reading, science tests and suspension. There was no difference on vocabulary, maths and reading comprehension, attendance or grade retention between children in care and their peers. Maltreatment partly mediates relationship between being in care and literacy and language test scores and is complete mediator for reading and science.

Farruggia, Greenberger, Chen, & Heckhausen (2006), USA	163 children in care age, age 17, matched to comparison group on age, gender and ethnicity	T-test	Survey & interview with children	Children in care had lower grades than comparison group.
---	--	--------	----------------------------------	--

Study	Participants	Methodology	Data source	Results
Flynn & Biro (1998), Canada	43 children in care, age 1 to 19, comparison group 1600 children from same school	Simple change	Survey	41% of children in care repeated a grade compared to 9% of comparison group.
Font & McGuire (2013), USA	682 children in care, age 6 to 17, comparison group 448 children in contact with children's services	Regression and Propensity Score Matching	Administrative database	Performance of children was not different from children at home at either or both time points.
Geenen & Powers (2006), USA	158 children in care, age 13 to 21, matched to comparison group on disability and randomly sampled comparison group	T-test, ANOVA	Survey of teachers	Children in care with special educational needs (SEN) had lower credits earned towards graduation and grade point average (GPA) than children in care without SEN, children not in care with SEN and general population. Children in care without SEN and children not in care with SEN had similar credits earned towards graduation and GPA. Children with SEN in care and not in care had similarly low grade retention rates compared to children in care without SEN and general population. Children in care without SEN and children in general population had similar maths and reading scores, which were higher than children in care with SEN and children not in care with SEN.
Iglehart (1995), USA	111 children in care, age 16, compared to test scores of children in general population	Chi-square test	Social worker survey and case file reviews	66% of children in kinship care were at grade level, 60.6% of children in foster care were at grade level and 89.9% of comparison group at grade level.
Kortenkamp & Ehrle (2002), USA	819 children in care, age 6 to 18, comparison group 12 744 children in families at-risk	T-test, ANOVA	Administrative database	Children in care and children at risk had similar suspension rates; rates were higher than children in general population.
McClung & Gayle (2010), Scotland	1407 children in care in care, age 15 and over, comparison group children in contact with social services.	Linear regression	Administrative database	Children in care have lower test scores than children in general population but better scores than comparison group of children in contact with social services.
Mitic & Rimer (2002), Canada	3523 children in care, age 5 to 18, compared to test scores of children in general population	Simple change	Administrative database	More children in care perform below expectations in reading, writing and numeracy compared to children in the general population.

Pears, Fisher, Bruce, Kim & Yoerger (2010), USA	85 children in care, age 3 to 6, comparison group 56 children in families with low SES	Path analysis	School records and interviews with teacher and carers	Children in care had lower academic competence than comparison group.
Pears, Kim, Fisher & Yoerger (2013), USA	93 children in care, age 5&6, comparison group 54 children in families with low SES	Structural Equation Modelling	Surveys of teachers and carers and test scores	Children in care had lower academic competence than comparison group.

Study	Participants	Methodology	Data source	Results
Rees (2013), England	193 children in care, age 5 to 18, compared to test scores of children in general population	T-test	Interviews and surveys of children, carer & teachers. Case file reviews	Children in care had lower average cognitive, reading and literacy scores than children in the general population.
Sawyer & Dubowitz (1994), USA	372 children in care, age 5 to 19, comparison group children in same school	T-test	Test scores	Children in kinship care had worse reading and maths scores than children in the general population.
Scherr (2009), International	25 692 children in care	Systematic review and meta-analysis		Children in care had higher rates of grade retention.
Smithgall, Gladden, Howard, Goerge & Courtney (2004), USA	4467 children in care, age 6 to 18, comparison groups maltreated children in families, children in permanent placements, children in same schools	Multi-level modelling	Administrative database	Children in care more likely to perform in bottom quartile on reading. Gap with peers increases with age but reduces when demographic and school factors are controlled for.
Townsend (2012), Australia	1995 children in care, age 5 to 18, compared to test scores of children in general population	T-test	Administrative database	Children in care have lower mean test scores in reading, writing, language and numeracy than general population.
Trout, Hagman, Casey, Reid & Epstein (2009), USA	13 401 students from 29 studies	Narrative systematic review		Children in care perform below peers in the general population.
Turpel-Lafond (2007), Canada	32 186 children in care, age 5 to 18, compared to test scores of children in general population	Simple change	Administrative database	21% of children in care graduate compared to 78% of the general population. On Foundational Skills Assessment (Canadian test), children in care perform worse than children in the general population and gap increases with age.
Warburton, Warburton, Sweetman & Hertzman (2014), Canada	2260 boys in care, age 16&17, compared to boys in contact with children's services	Instrumental variables	Administrative database	Children in care are less likely to graduate than their peers.

Weiss & Fantuzzo (2001), USA	500 children in care, age 7&8, comparison group children in same school, including maltreated children not in care	Logistic regression and moderation analysis	Administrative database	Children in care have worse academic performance and attendance but not grade retention rates than their peers.
---	--	---	-------------------------	---

Appendix 2:

Glossary of Key Terms

This review of studies that provide quantitative data on the relationship between being in care and educational outcomes highlighted a number of methodological issues. Definitions and examples are provided in this Appendix for those wanting to engage in the more technical aspects of the research. Not every method for all included studies is detailed here, rather only those which are named in the main text of the review. For full details of the methods employed in included studies, readers should refer to the original study.

Correlation

A correlation describes the degree of the relationship (strength or weakness) between two variables. For example, we might investigate the correlation between attendance at school and grades. If there were no relationship, attendance and grades would not be linked so that if attendance was low, grades could be high or low. A strong relationship (correlation) would mean that the higher the attendance the better the grades. Correlations can be spurious, however. For example, we might find a strong relationship between attendance and grades, but then discover that children with low attendance are in fact mostly children with severe health problems requiring regular hospital treatment. In this case the health problems are more likely to be the reason for low grades than low attendance. In this case, it is said that the health problems confound the relationship between being in care and educational outcomes.

Causality

Causality implies a causal relationship between two variables; that is that the occurrence of one causes change in another. Saying that a health problem is the reason for low grades implies a causal relationship between the two. It means that in the presence of the health problem, low grades are the most likely outcome. Demonstrating causality is extremely difficult, and the most reliable method of testing it with data, is the randomised trial (Pearl, 2009). So, in order to determine whether there is a causal relationship between being in care and poor educational outcomes, children would need to be randomly allocated to enter care or a community alternative,

which is clearly not feasible or ethical. For this reason, it is unlikely that causality can ever be determined with certainty. Other methods attempt to emulate randomisation to approach causality but these results, and causal claims, should always be interpreted with caution.

Instrumental Variables

The Instrumental Variables approach is a complex statistical technique borrowed from the field of economics. Researchers in social work, social policy and sociology have used this method to examine the effects of social interventions on a number of outcomes (Dobbie & Fryer, 2009; Doyle, 2013; Foster, 2010; Jaffee, Strait, & Odgers, 2012; Warburton et al., 2014). The technique attempts to account for some of the variance in outcomes that is explained by unobserved factors, by identifying 'instrumental' variables which are related to the predictor (in our case, care status) but not directly related to the outcome (in our case, educational attainment). In Warburton et al. (2014), two instrumental variables were identified. One of these was the caseworker administrative discretion

in assessing the needs of young men and deciding whether they should be placed in care or not. The method, as it pertains to estimating the effect of being in care on different outcomes, is described in detail in Warburton et al. (2014) and Doyle (2013).

Longitudinal analyses

Longitudinal analyses examine change over time. In contrast, cross-sectional studies explore data at one time point only. Longitudinal analyses are useful to examine the relationship between being in care and educational outcomes because they can illustrate whether children in care make progress over time and whether this is at the same rate as their peers.

Heath et al. (1994) for example, test children at three different time points to explore how they progress over time (or not). Longitudinal analyses don't necessarily require comparison groups, but by including a comparison group Heath et al. (1994) is able to account for maturation (natural or expected progress). Moreover, the study used a comparison group that was similar to the study sample of children in care which reduces the risk of bias arising from baseline differences between participants (called

'selection bias'). Conger and Rebeck (2001) collect data before children entered care and at the same time for all participants, this further reduced bias in subsequent analyses.

Meta-analysis

A meta-analysis builds on the findings of a systematic review to provide a quantitative and statistical summary of the findings from included studies. To undertake a meta-analysis, included studies should be similar enough (for example, similar population and intervention) that a numerical summary may have meaning. Studies are brought together using effect sizes for each study and often weighted according to their sample size.

Propensity Score Matching

Propensity score models were designed to mirror RCTs by matching groups of individuals on a range of characteristics that predated their exposure to a given risk factor or 'treatment' (in our case, being in care). The technique involves identifying the 'typical' characteristics of individuals within each group, and exploring whether these differences might explain educational variation, rather than the care status, per se. In Font and McGuire (2013), children

in foster care are matched to children who are similar in terms of demographic characteristics, maltreatment history and school engagement, to estimate the effect of foster care placement on performance.

Regression

Regression is a statistical tool for estimating relationships between variables and an outcome. Specifically, multiple linear regression estimates the correlation between one variable and an outcome while controlling (accounting for the variation) for other variables. For example Berger

et al. (2015) used regression analysis to explore the relationship between being in care and educational attainment. They control for a number of variables including for example gender, ethnicity, free school meals and grade retention. Findings indicate the relationship between being in care and educational attainment above and beyond the relationship between the control variables and educational attainment. In logistic regression, the outcomes are binary, for example success or failure.

<http://reescentre.education.ox.ac.uk>

The Rees Centre is funded by Core Assets, a global independent provider of children's service

早稲田大学大学院総合研究機構
社会的養育研究所
監訳チーム
担当：高石啓人（山梨県立大学）
2021（令和3）年6月

Supported by  日本 THE NIPPON
財団 FOUNDATION